

The Irish Body in James Joyce' s Works: Oppression and Liberation

田中, 恵理

<https://hdl.handle.net/2324/4474912>

出版情報 : 九州大学, 2020, 博士 (文学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : やむを得ない事由により本文ファイル非公開 (3)

氏 名	田中 恵理			
論 文 名	The Irish Body in James Joyce's Works: Oppression and Liberation (ジェイムズ・ジョイス作品におけるアイルランドの身体表象：抑圧と解放)			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	鶴飼 信光
	副 査	九州大学	准教授	高野 泰志
	副 査	九州大学	教授	高木 信宏
	副 査	西南学院大学	教授	河原 真也

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

上記の論文は、アイルランドの小説家ジェイムズ・ジョイス（1882-1941）の作品における登場人物たちの身体描写について、19世紀末から20世紀初頭のアイルランド社会との関連から考察し、作品で描かれる身体が、苦難の歴史を抱えながら独立へと向かうアイルランドの社会的背景を写し出す鏡であるだけでなく、そうした社会に存在する支配に対する人々の抵抗と自己肯定を示す媒体でもあることを明らかにするものである。

序論、結語以外に4部9章から成る本論文の第1部“*Ireland, the Body and Joyce*”は、第1章でアイルランドの人々を身体的に抑圧する要因として、イギリスによる植民地化とアイルランドのナショナリズムの歴史的対立、貧困と不衛生に起因する病の蔓延、ローマ・カトリック教会による支配という三つの要因を挙げて分析し、第2章では、先行研究を概観しながら、社会、文化の実態解明に比重を置いている近年の研究の傾向を批判的に捉え、身体描写の分析を研究の中心に据えて、身体と社会の関係を考察していくという、独自の姿勢を提示する。

第2部“*Bodies of Male Characters*”は、第3章で『ダブリナーズ』において、男性たちの麻痺からの解放が、他社の進退を通して自己の身体状態を意識化することで達成されていること、第4章で、『若き日の芸術家の肖像』の主人公スティーヴンが身体よりも精神に価値を置くようになっていき、その偏狭な知識偏重のせいで抑圧からの限定的な解放しか得られないことを解明している。第5章では、『ユリシーズ』の主要人物の一人ブルームが、兵士に適した国民の身体の育成を念頭に置いた身体鍛錬の流行に影響を受けつつも、優生学的に弱者を排除する姿勢とは逆の、障害のある人々や病者を包摂する姿勢を有しており、彼が強さと弱さの二項対立を解体する視点を持ち得ることが解明される。

第3部“*Bodies of Female Characters*”は、第6章で、『ダブリナーズ』で描かれる女性たちの抑圧された状況や結婚への執着が彼女たちの身体を通して描かれ、そうした彼女たちの麻痺が言葉を発せない口に象徴されていることとともに、最後の「死者たち」のグレタが秘めた過去と思いを語る行為によって女性解放の可能性が示されていることを考察する。第7章では、『ユリシーズ』において、ポルノグラフィのように描かれる女性たちの身体が、男性の欲望に迎合するように描かれている一方で、女性たちも自己の身体を利用することで男性中心社会における自己の存在価値を示そうとしており、ポルノ的な女性の身体描写には女性たちの自己肯定を見ることができると解明される。第8章では、『若き日の芸術家の肖像』の海辺の少女と『ユリシーズ』第18挿話の

モリーの身体描写に注目しながら、彼女たちの身体が男性の欲望を反映しない世俗的な姿で描かれていて、そこに父権社会からの女性の解放が読み取られることを明らかにしている。

第4部第9章は、ジョイスがダブリンを脱出し、大陸を転々とする人生を送りながら、作品ではダブリンを描き続けたことの意味を、アイルランド社会に捕らわれている人々と彼らの解放を作品中で描くことによって、彼自身の過去からの解放を追い求めていることに見出す。

本論文は、古いものから最新のものまで先行研究をよく踏まえ、作品のこれまで注目されていなかった細部と、当時の社会や政治の具体的な状況との両方をよく分析しながら、抑圧、麻痺からの解放という主題を、身体表現という観点から解明する、独自性のある優れた研究であると評価することができる。